

FD研究：現行授業評価の不合理と改善提案

日下 和信

大阪キリスト教短期大学

1. 授業評価は何のためにしているのか

多くの大学で「教員が学生の授業評価を受ける」ようになって来たが、その授業評価にどんな意味が見出せるかをそろそろ本気で検討する必要があるように思われる。なぜなら授業評価を始めてはいるけれど、熱心な大学を除いて、なかなか授業研究・授業改善のムードが盛り上がってこないからだ。授業評価は何のためにしているのか、巷で耳にする理由は「第三者評価を受ける際のデータとして必要だからやっている」ようだ。実際、それが多くの大学の本音なのではなからうか。大変な労力と費用を掛けて、本来の目的が追求されていないとなれば、余りにも勿体ないのではないだろうか。

2. 現行、学生による授業評価の矛盾点。サボリ学生に評価する資格無し

筆者は、授業研究を専門としてきたので、学生による授業評価の重要性を理解しているつもりであるが、授業の感想を読んでいる時に「腹立たしい思い」をすることがしばしばある。それは、明らかに授業中寝ていたり、まじめに聞いていない学生が「難しい・解らない」と書いてくることである。“まじめに聞いて解らないのなら”、教員側に配慮する余地が多々あるが、真剣に聞かずに評価の時だけは、難しいを連発する。こういう学生には、「学問に王道なし」ということわざを教えて、学ぶ気がないなら退学するのがよろしいと厳しく勧告している。現在は、生涯学習時代だから、本気で勉強しようと思ったらまた大学に入学しなさいと。全て教育は、少し難しい事柄を承知で教えているわけで、真面目に学んで解り、サボっていれば解らないのは当然の帰結なのである。それなのに多くの大学の授業評価システムでは、サボリ学生にも真面目な学生と同一の資格を与え「教員の授業を評価している」。熱心に教えているつもり教師にとって、理屈に合わないデータを見せられると内心面白くないのは正直な気持ちである。筆者は、サボリ学生が「難しい・解らない」と授業評価に書く資格はないと考える。それ故、授業評価や授業改善を多くの先生方に呼び掛け共同歩調をとって貫うためにも、不合理な欠陥は是正されねばならない。そこで、学生にも授業者にもよい改善提案があるので示したい。

3. 最初に「評価する資格を自己申告させて」、授業評価をして貰う

この不合理についての改善策は、授業評価者としての「資格」または「重み付け」を個々の学生に自己申告させて後、集計すれば防げるということである。質問紙の最初の質問を「あなたの授業態度から考えて、授業評価をする資格が何%ありますか」と聞き、4～5段階で答えさせて、その重み付けを尊重して、データ処理するのである。どこの大学もデータ処理は、コンピュータがしているわけだから、集計プログラムを少し変更するだけで、より妥当な授業評価の値が得られるのだから、手直しをする値打ちはあると思われる。考えてみれば、この質問・このデータは、相当大事な値になりうる。学生に対しては「評価することの責任感」を呼び覚ますことになる。「俺（私）は、一人前の学生でない」と自ら評価しなければならぬ“後ろめたさ”が、勉学面で何かよい影響を与えたい。熱心に学ぶという学生の本分を強く自覚する切っ掛けになることを望みたい。他面、

学習者の多くが、「小さい重みしか申告しなかったら」、それは熱心に授業を聞いていないと言う告白に相当し、授業者に対する相当辛い評価に姿を変える。そのようなデータが出れば、授業者に切実な状況として授業改善が望まれていることを意味するからである。

4. 授業アンケートの質問は、果たして妥当かどうか

質問紙の第一問目が、先に提案したような「授業評価資格の自己申告」を問うものから始まることを望みたい。そして、それに続く質問になるが、現行の質問紙では「質問して何になるか」と思われるような質問がかなりある。例えば、「視聴覚機器をよく使ったか・学生のレベルに合致していたか・始業終業時間は守られていたか・どの程度予習をしたか・黒板の書き方使い方や声が聞こえたか」等々。なぜ、そのような質問が考えられたかについては、良心的に推測すれば、それなりに理由付けはできるが、“授業評価の本質をはぐらかかねない質問が多い”のが大問題だと思われる。授業には、それぞれのTPOがあり、「視聴覚機器をよく使うこと」が、良い授業を構成する指標ではないので、こういう質問の仕方は適切でない。また、授業のレベルが、妥当かどうかを授業終了時に聞いても仕方がないことで、「難しすぎる・易しすぎる」ということは、授業の開始数回の内に、学生から注文があって然るべき問題だと思われる。「言わずもがなの質問」は、早々に削除されることが望まれる。また、予習にしても、ゼミやテキストを決めた語学以外の授業では、なかなか予習をさせられないのが残念ながら日本の実情でないだろうか。多くの科目で予習をさせるには、大学運営の根幹に関わる部分で、研究・議論・吟味して、取り組まなければならない問題で、その覚悟無く安易にこのような設問をするのは良くないと考えられる。また、授業者の主体性で検討・案出されてくる「授業の構成・進め方」に対する質問は、本来学生の評価になじまない性質のものではないだろうか。その他、何のための授業評価なのかを疑わせるような質問が結構多数あり、読みようによれば、大学の評価を自ら下げているような質問をしている場合も正味ある。是非、再吟味していただきたい。

5. 授業評価の本質と学生・教師間の良い意味の緊張関係

やはり「授業評価の根本は、学習内容が解ったか解らなかったか」に集約されるものと思われる。筆者は、ここが本質だと考えている。この本質に照らして、果たして的確な質問が用意されているかどうか。質問の基本的イメージは、「学習者に対して、アナタは真剣に学ぼうとしたか？。その念押しの質問が有って、そして、授業は理解できたかどうか？。授業者は、アナタの学びに満足できる対応をしてくれたかどうか？」を問えば十分なように思う。筆者の授業アンケートに持つイメージから言えば、上の3点の質問が主要なもので、その他多くの項目の質問が並ぶ必然性を見出しにくい。コンピュータ処理に乗せるために、多数の質問項目を作った方が詳細なデータになると考えたふしがあるのは理解できないではないが、本質でない項目がだらだら続くのはいただけない。今一度、「学生による授業評価」を何のためにしているのかという目的を明確にして、アンケートの質問項目をじっくり研究する必要があると思う。質問項目を吟味厳選した後、「授業」に感じる不満、改善要望等を、記述式で書いてもらい、授業者もそれを真剣に受け止め、授業改善に生かすことが授業評価の本来の姿だと思われる。授業改善への真剣で厳しい取り組み姿勢を質問紙上に、にじませ得たなら、「学生による授業評価の活動」から、教師にも学生にも「何か手応えのある良いもの」が産み出されてくると思われる。

2006. 11. 14